

深イ〜話!

No.106

— 船戸クリニック院長 「がんは敵じゃない」 —

私は大学卒業後、消化器科医になったのですが、これが運命の選択になりました。消化器外科はがん患者が非常に多いんですね。

私はずっと「がん細胞はきれいに取れば取っただけ治る」と学んできました。しかし実際に自分でメスを握り、多くのがんの患者さんを見ていくうち、それが間違いだと思うようになりました。

がん細胞は、元々自分の正常な細胞だったものが、ある原因で変化します。原因を取り除かなければまた再発します。私はメスで懸命にがんを切り取る手術をしてきましたが、いくらやっても原因まで取ることはできませんでした。

そして10数年メスを握り続けてきた私が最終的に出したのは、「原因を無くさなければ治したことにはならない」という結論でした。

10年前、私は有難いことにがんになりました。本当にめでたいと思いました。なぜか？
私はそれまでがん患者さんから、よくこんな言葉を言われていました。

「がん患者の気持ちはがん患者しか分からない」と。

たとえば会社が倒産した人が、何の経験もない人から「気にするな」と言われても、「おまえにオレの気持ちが分かってたまるか」と腹が立つだけでしょう。

でも同じ経験をした人から言われると励みになりますよね。

「私もがんだったんだよ」と患者さんに言うと、「じゃあ、先生も私の気持ち分かってくれますよね」と嬉しそうに笑います。それから、私は患者さんにさらに寄り添うことができるようになりました。

がんは生きています。そしてがんは「話す」のです。私の経験から言えば、本当に雄弁に語ります。

私のクリニックに来るがん末期の患者さんに、「がんはあなたに何と言っていますか？」とアンケートを取ると、こんな回答が出されます。

「自分を大切にしながらと言っています」「よくやると褒めなさいと言っています」

「常に希望を持ち広い視野を持ちなさいと言っています」

つまり「希望を持ちなさい」「わくわくしなさい」「生き方や家族との絆を見直しながら」と言っているということです。

そして最終的にがんが言うのは「変わりなさい」ということです。

そう考えていくうち、私は「がんは本当に敵なのだろうか」と思うようになりました。

そして「病は災難ではない。実は『あなたの生き方はそうじゃないでしょう?』という魂の呼びかけではないか?」とまで思うようになったのです。



※船戸先生は、今年「リボーン洞戸^{ほらど}」というがん予防滞在型リトリートをオープンしました。
「がんの言い分」を聴く日本で初めての施設です。
興味のある方は、リボーン洞戸(0581-58-2311)まで連絡してみてください。